

かささぎ通信 第153号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2025年 11月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

2025年10月の「森三郎の作品を読む会」では、
前回に続き、「城下町」(季刊『新児童文化』復刊1946年
「8月」を読みました。

今回読んだ「城下町」の範囲には、主人公の小松宗之助が四年生の時のエピソードが二つ語られています。お父さんが亡くなってから疎遠だった岸田家のおじいさん・おばあさん・譲叔父さんとの関わりが出てきます。

お父さんの弟の譲叔父さんは小学校の先生になって、宗之助たちは書方と唱歌を教わるようになりました。ある日、宗之助は友達四人と昼休みにお城山まで出かけ遊んでいました。杉の木の梢に鳥の巢のあらを見つけ夢中になっているうちに、午後の始業のベルを聞き漏らしてしまいます。唱歌の練習の音が流れてきて、宗之助たちはあわてて唱歌室にかけもどりました。この話は『赤い鳥』1933年10月号に載った森三郎の「杉でつばう」と同じ題材です。『赤い鳥』の時には、家では両親から甘やかされていた主人公が友だちとのつながりの中で成長する、自我の芽生えをテーマにした作品でした。「城下町」では唱歌の先生の譲叔父さんの前でした失敗談として描かれています。

しかも「城下町」では、学校の方から聞こえてきた歌は校長先生がこの間作って譲叔父さんが作曲した校歌という設定で、亀城尋常高等小学校の校歌歌詞一、二、四番がそのまま挿入されているのです。そして叔父さんは子どもたちから事の顛末を聞いて、「鳥の巢」という新しい歌を教えてくださいました(詳細「かささぎ通信」第61号)。実際の時系列で言うと、大正六年、森三郎尋常小学校入学、同年校歌制定(高須鈍吉 作歌、幾尾純 作曲)、大正十四年「鳥の巢」(北原白秋 作詞、広田龍太郎 作曲、『赤い鳥童謡』第八集所収) 発表ですから、四年生の宗之助が校歌を覚えた時にはまだ「鳥の巢」の歌はできていませんが、三郎は上手に話の中に組み込んでいます。

もう一つのエピソードは校医の岸田のおじいさんのことです。新学

期の身体検査の結果、視力の弱いものばかりが岸田先生の家で再検査になり、宗之助も加わります。検査後、宗之助はおじいさんから残るように言われ、奥の座敷で岸田家の家族の接待を受けたのです。そこにはおじいさん、おばあさん、譲叔父さんの奥さん、男の子、女中さんがいて、四大家族の小松の家とは違う華やかさがあったことでしょう。偶然の機会に岸田家を訪れた孫息子を、たくさんのケーキやまだ珍しい紅茶でもてなし、直接会ったことのない次男のことも気にかける岸田家の人々。お城山の一件もちゃんと知っていましたから、岸田家では普段から小松の孫たちの動静を気にかけているのでしょう。「もしも」などということはありえませんが、跡継ぎの息子が生きていれば、二人の孫息子たちの成長を間近に日々見守ることができたはずです。岸田のおじいさんは「けんかをしたまゝ向うが死んでしまつて」と、竹馬の友の小松のおじいさんと喧嘩別れしたなり幽冥境を異にしたことを寂しげに語っていました。

宗之助は子どもながら、岸田のおじいさん・おばあさんが自分の前で、小松のおばあさんやお母さんの悪口を一言も言わなかったことに思い至り、岸田家の悪口ばかり並べる小松のおばあさんと比べてしまいます。帰り際に「今日のことは家へは黙つといで」というおばあさんを、「子どもの心の負担」になるから「そういう知恵をつけるな」とおじいさんはたしなめます。小松の家で一方的に聞かされていた岸田のおじいさん・おばあさんの印象とはずいぶん違ったようです。

しかし参加者からは、以前から威厳を大事にする態度であつたおじいさんが、視力検査の時に「右、左」を言えず「東北、西南」などと言う友だちのことを笑った態度に対する批判も出て、興味深い会でした。次回も続きを読みます。

〈次回予定〉2025年12月12日(金)午後一時半~三時半

「城下町」(季刊『新児童文化』復刊1946年8月) 続き、

「姉」(『銀河』1947年4月号) を読む